

廻船問屋 瀧田家

常滑で廻船問屋を営んでいた瀧田家は、収益の大きな商売を始めて間もなく 1850 年に邸宅を建てた。その旧宅は忠実に復元されており、一族とその生活様式、彼らの海運業について展示されている当時の家具、陶磁器、漆器などから学ぶことができる。また、地元の海運の歴史を説明する有益な展示もある。

18 世紀にこの地域の産業と経済が発展するにつれ、常滑は知多半島に位置することから海運の中心地となった。瀧田家は所有する数隻の小さな木造船を使って、常滑焼や地元産の米や酒を江戸（現在の東京）に運び、大豆や小麦を持ち帰った。

江戸への航海の前に、船は伊勢湾を渡って三重県の鳥羽という港町まで行き、そこで乗組員は天候を確認した。航海条件が整うと、7 日から 10 日間の江戸への航海に出発した。当時の船の 15 分の 1 サイズの複製が家の中に展示されている。

市が管理を引き継ぐ前、この家に最後に住んでいたのは、瀧田英二と妻のはるみ、そして 2 人の子供たちだった。娘のあゆち（1932-2005）は、男性中心の日本の航空界におけるパイオニアとしてよく知られている。彼女は日本航空初の女性役員であり、後に日本政府で顧問を務めた。廻船問屋 瀧田家は「やきもの散歩道」A コースに含まれる。